

みやぎ食の安全安心消費者モニター アンケート調査結果報告

アンケート対象者 「みやぎ食の安全安心消費者モニター」 1,014人(平成23年9月12日現在)

アンケート回答者数 594人(回収率 58.6%)

調査実施期間 平成23年9月

アンケート回答者属性

男女構成

男性	女性	不明
120	382	92

年代別内訳

-30代	40代	50代	60代	70代-	不明
58	101	122	169	120	24

未成年の家族の有無

あり	なし	不明
184	385	25

男女間、年代間、未成年の家族の有無間の有意差については、有意水準5%で有意差検定を行っている。

《結果概要》

食と放射性物質について

9割弱の回答者が、放射性物質を気にしており、その理由も人体への影響の不安から検査結果への不信感、暫定規制値そのものへの不安など幅広い。

食品に対する暫定規制値についての認知度はそれほど高くないが、高齢者の方が認知度は高い傾向にある。「暫定規制値以下なら安心」よりも「以下でも不安」の方が高く、また「暫定規制値が低すぎる(厳しすぎる)」より「高すぎる(甘すぎる)」の方が高く、暫定規制値に対する不安感・不信感が強く表れている。

放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報については、回答者の約2/3は確認しており、その確認方法はテレビ・ラジオ、新聞が圧倒的に高い。

暫定規制値を超える放射性物質が検出された場合の対応としては、「その産地の全ての農畜水産物について購入を控える」、「その農畜水産物については、他の産地のものでも購入は控える」といった回答はあまり多くなく、比較的冷静な対応を取っていることがうかがわれるが、一方、出荷制限が解除された場合の対応としては、放射性物質が「検出されていても暫定規制値以下なら食べる」は低く、「不検出なら食べる」、「暫定規制値以下であっても検出されていれば食べない」が高く、暫定規制値に対する不安感・不信感の影響がうかがえる。

原発事故後の食品購入行動の変化としては、「出荷制限などの情報を積極的に集めるようになった」、「復興支援のため、被災地産のものを積極的に買うようになった」が高い一方、「宮城県産以外のものを買うようになった」、「国産より外国産を買うようになった」は低く、ここでも比較的冷静な対応がなされているといえる。

食の安全安心について

回答者の約8割強が食の安全安心全般について不安を感じており、昨年度調査時(約8割)と大きな差はないが、不安の度合いは若干強まっている。

特に、「環境汚染物質」、「残留農薬」、「残留抗生物質」、「輸入食品の安全性」等に対する不安が強く、放射性物質の影響が「環境汚染物質」への不安が増してきている。

昨年に比較して食の安全安心に関する意識は、「不安を感じるようになった」、「やや不安を感じるようになった」を合わせると8割強となり、ここでも不安の度合いが強まっている。

食品の安全安心を確保するために大変重要だが、十分に行われていないと認識されている取り組みとしては、原発事故後の放射性物質に関する情報の混乱や錯綜等の状況から、「違反、事件、事故の速やかな情報公開」、「食に関する正しい情報の提供」等が上位にきている。

食と放射性物質について

問1 放射性物質について、どの程度気にしていますか。(単一回答)

1 非常に気にしている	2 ある程度気にしている	3 あまり気にしていない
4 ほとんど気にしていない	5 その他	

放射性物質については、「非常に気にしている」(35.4%)、「ある程度気にしている」(53.2%)を合わせて88.6%と大多数の回答者が気にしており、気にしていない回答者は「あまり気にしていない」(9.6%)、「ほとんど気にしていない」(1.7%)を合わせても11.3%と少なかった。

男女間に有意差が見られ、「ほとんど気にしていない」の割合が男性で高かった。

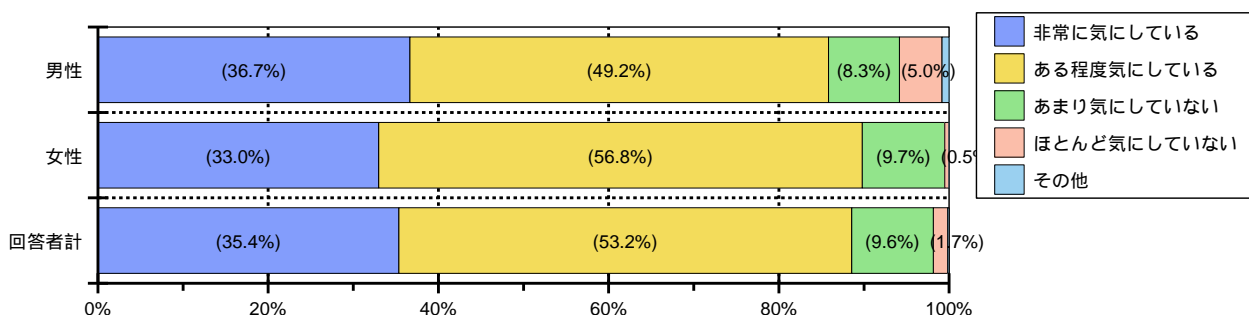


図1-1 放射性物質に対する意識 (男女別)

年代間にも有意差が見られ、70代以上では「非常に気にしている」の割合が高く「ある程度気にしている」の割合が低くなっている。年齢が上がるに従って「非常に気にしている」の割合が高くなる傾向が見られる。

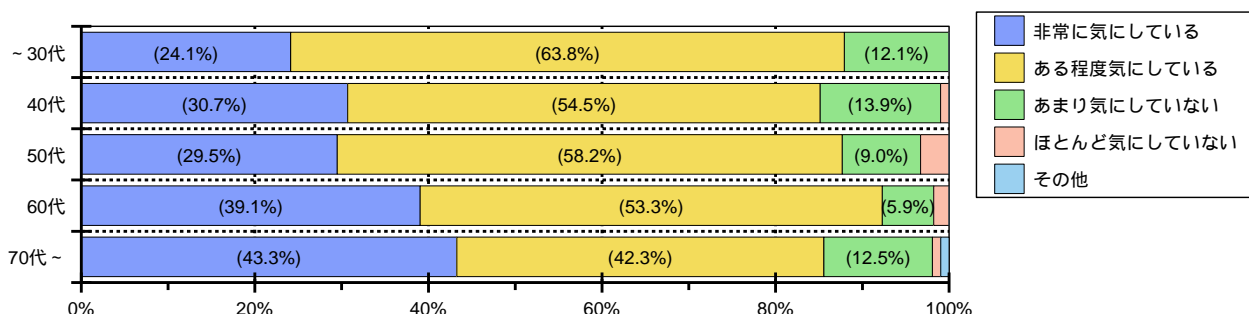


図1-2 放射性物質に対する意識 (年代別)

未成年の家族の有無間には有意差は見られない。

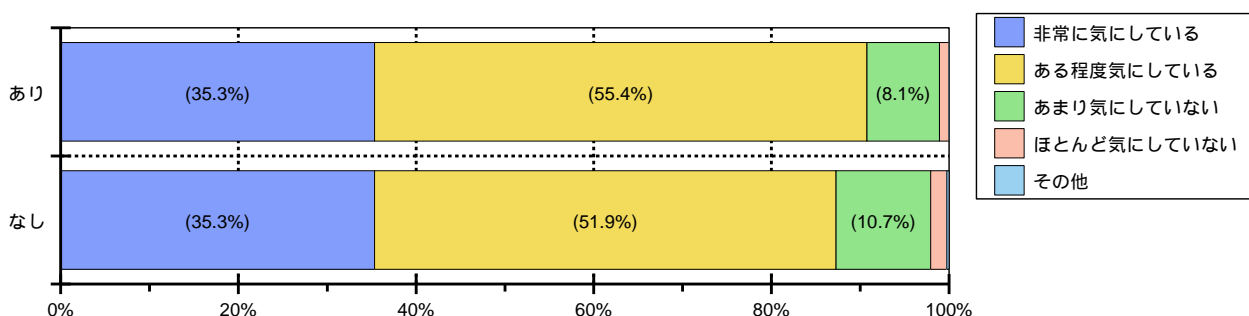


図1-3 放射性物質に対する意識 (未成年の家族の有無別)

問2 気にしている理由は何ですか。(複数回答)

- | | |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1 暫定規制値そのものが不安だから | 2 検査体制が不安だから |
| 3 公表された検査結果が信用できるものなのか不安だから | |
| 4 人体への影響が不安だから | 5 そもそも放射性物質がよく分からず不安だから |
| 6 その他 | |

放射性物質を気にしている回答者の理由としては、「人体への影響が不安だから」(27.9%)、「公表された検査結果が信用できるものなのか不安だから」(21.5%)、「暫定規制値そのものが不安だから」(20.4%)の順であった。

男女間に有意差は見られない。

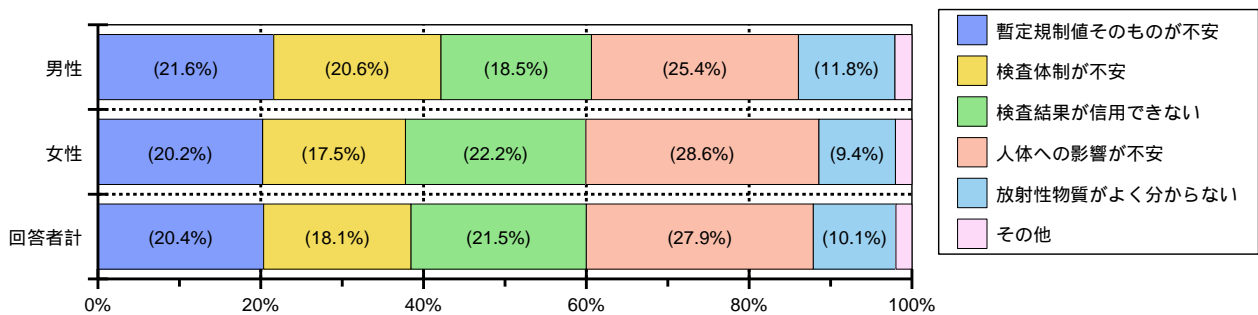


図2-1 気にしている理由(男女別)

年代間にも有意差は見られないものの、年齢が上がるに従って「人体への影響が不安だから」の割合が低下する傾向が見られる。

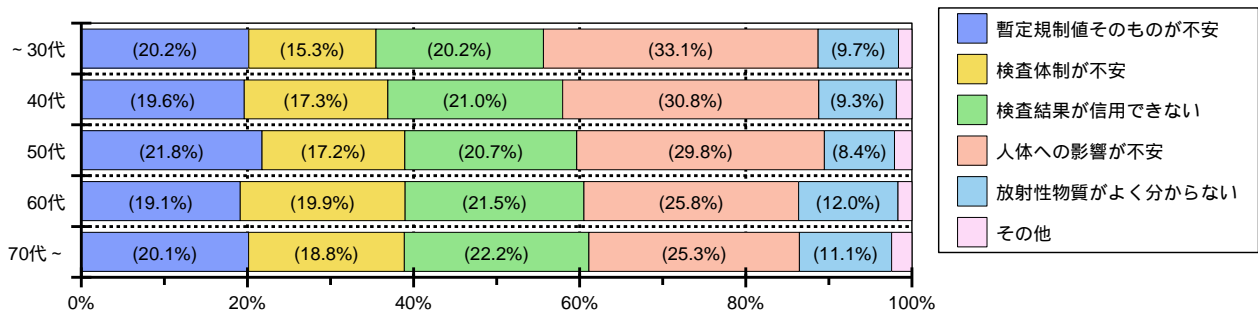


図2-2 気にしている理由(年代別)

未成年の家族の有無間にも有意差は見られないものの、未成年の家族がいる回答者の方が「人体への影響が不安だから」の割合が高い傾向が見られる。

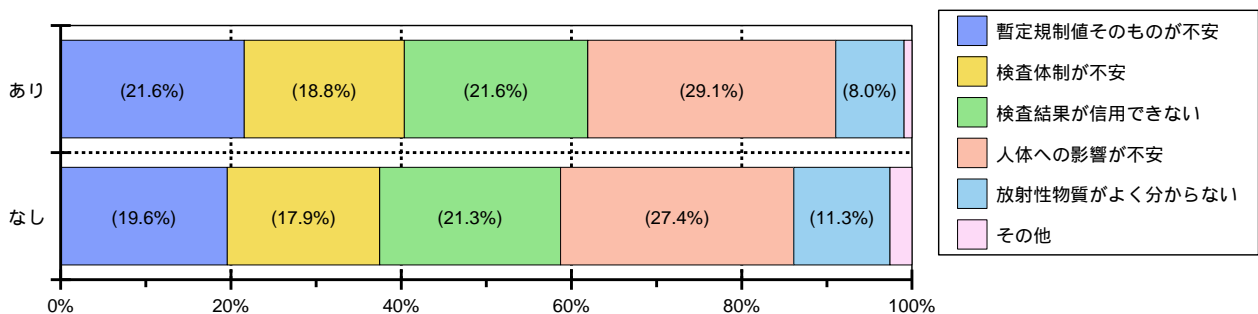


図2-3 気にしている理由(未成年の家族の有無別)

問3 気にしていない理由は何ですか。(複数回答)

- 1 暫定規制値以下なら安全だと思っているから
- 2 検査が十分に行われていると思っているから
- 3 人体に大きな影響はないと思っているから
- 4 放射性物質による影響が出るのは先のことから
- 5 放射性物質についてよく分からないので、気にしても仕方ないから
- 6 その他

放射性物質を気にしていない回答者は全体の11.3%と少ないが、その理由としては、「暫定規制値以下なら安全だと思っているから」(26.4%)、「検査が十分に行われていると思っているから」(24.5%)が高かった。

男女間に有意差は見られない。

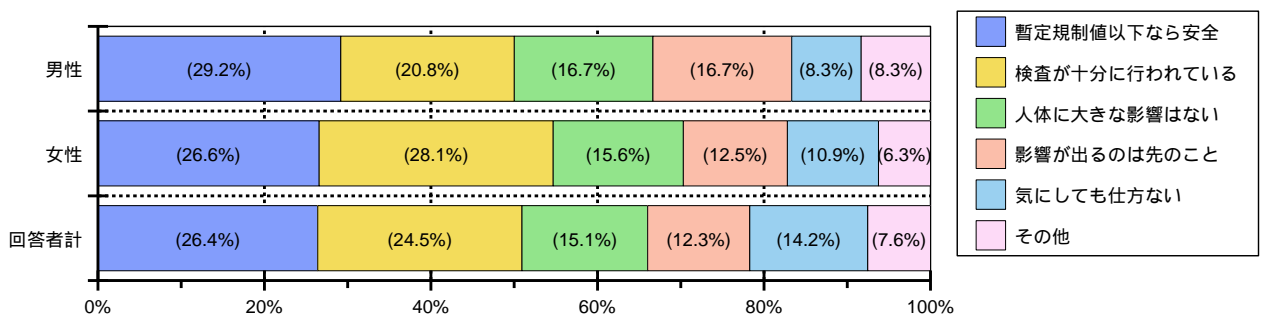


図3-1 気にしていない理由(男女別)

年代間ではバラツキが大きいように見えるが、これは回答者数が少ないためで有意差は見られない。

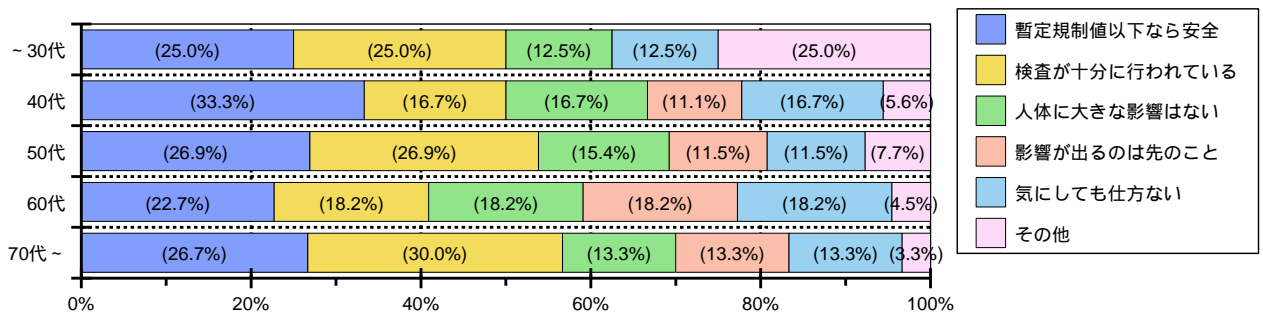


図3-2 気にしていない理由(年代別)

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

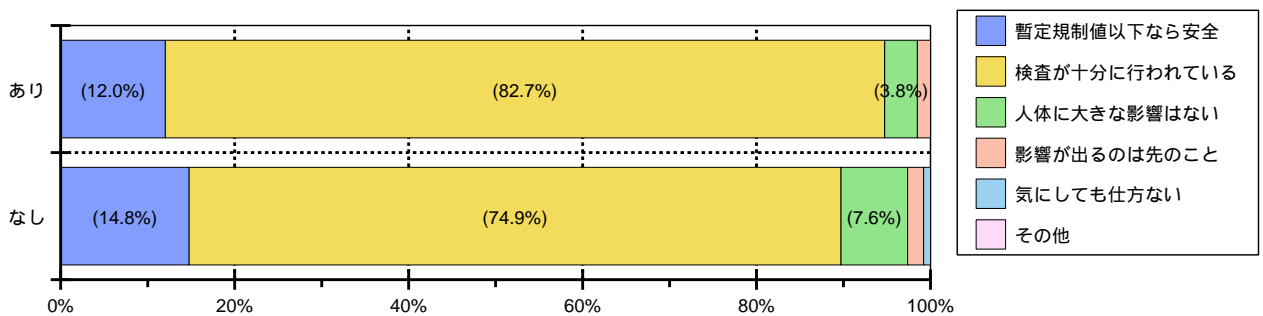


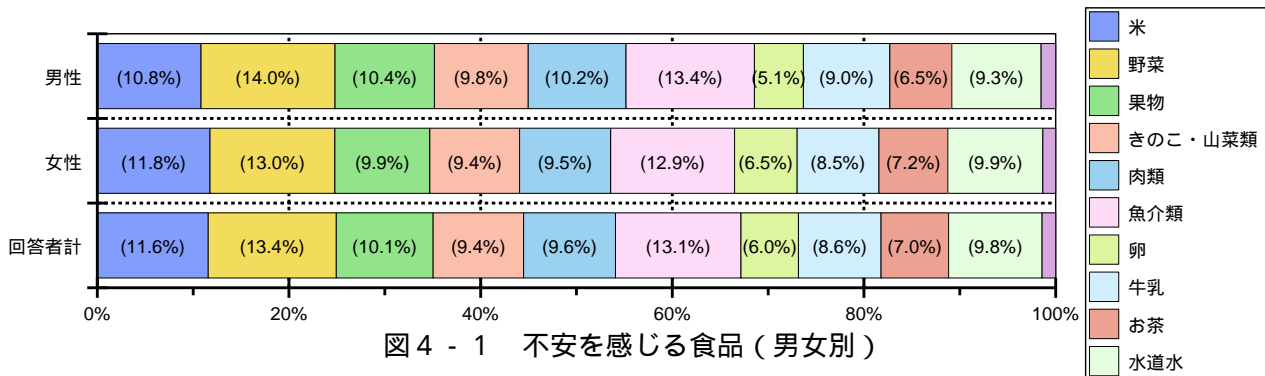
図3-3 気にしていない理由(未成年の家族の有無別)

問4 現在どのような食品が不安ですか。(複数回答)

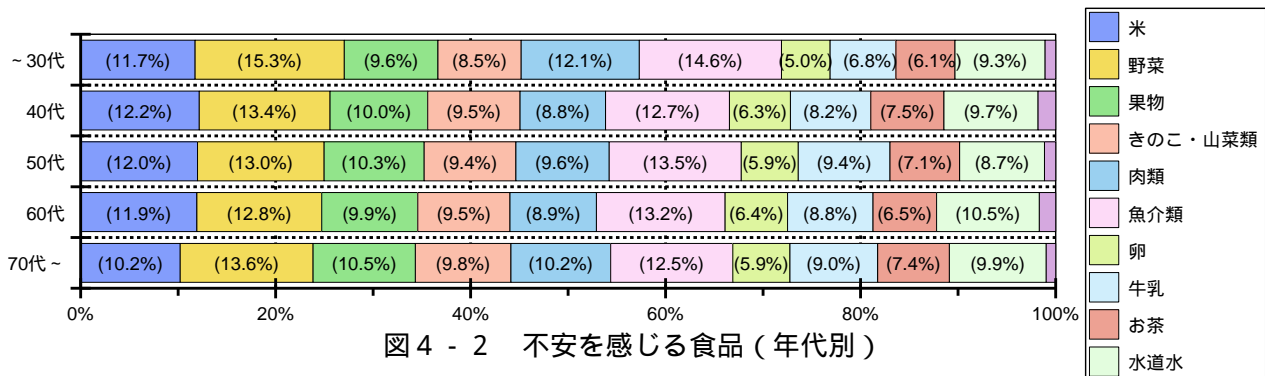
1 米	2 野菜	3 果物	4 きのこと・山菜類	5 肉類	6 魚介類
7 卵	8 牛乳	9 お茶	10 水道水	11 その他	

不安を抱いている食品としては、「野菜」(13.4%)、「魚介類」(13.1%)、「米」(11.6%)、「果物」(10.1%)の順であるが、全ての食品を選択した回答者も多く、食品による大きな差は見られない。

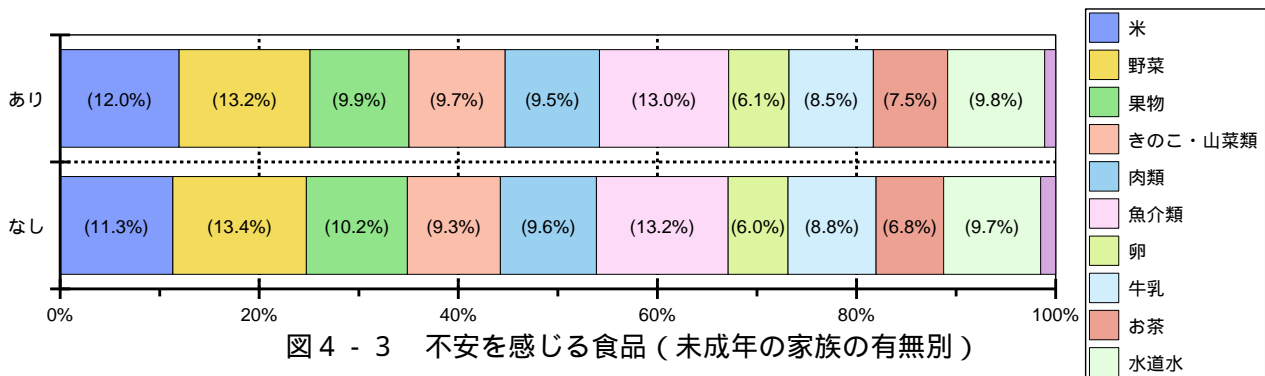
男女間に有意差は見られない。



年代間にも有意差は見られない。



未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。



問5 食品には暫定規制値が設けられていますが、その値を知っていますか。
 (単一回答)

- 1 大体知っている 2 一部知っている 3 ほとんど知らない 4 その他

食品に対する暫定規制値については、「ほとんど知らない」が45.3%と最も高く、「一部知っている」が37.9%、「大体知っている」が14.8%と、認知度はあまり高くない。

男女間に有意差は見られない。

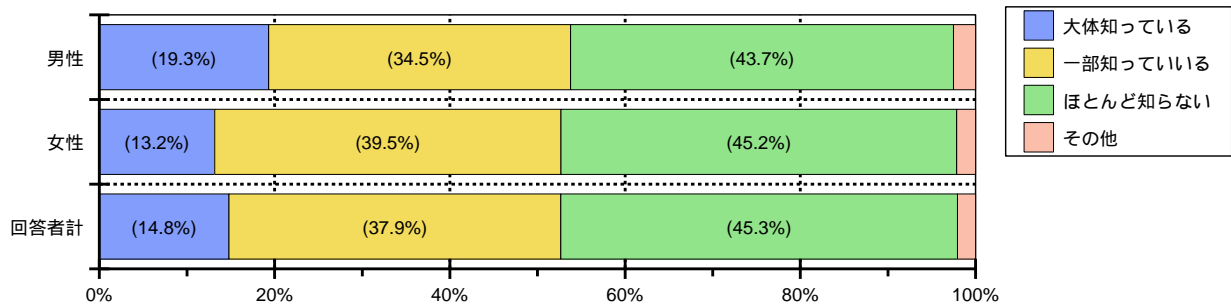


図5 - 1 暫定規制値の認知度 (男女別)

年代間には有意差が見られ、「一部知っている」が70代以上で高く40代で低いのにに対し、「ほとんど知らない」は40代で高く70代で低い。

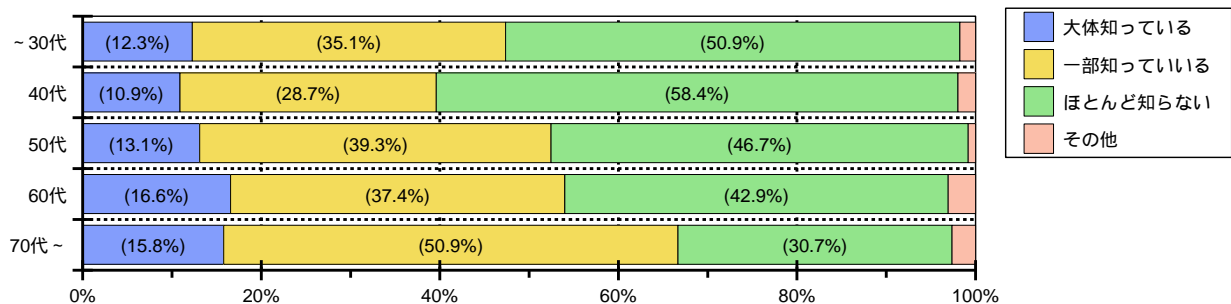


図5 - 2 暫定規制値の認知度 (年代別)

未成年の家族の有無間には有意差は見られない。

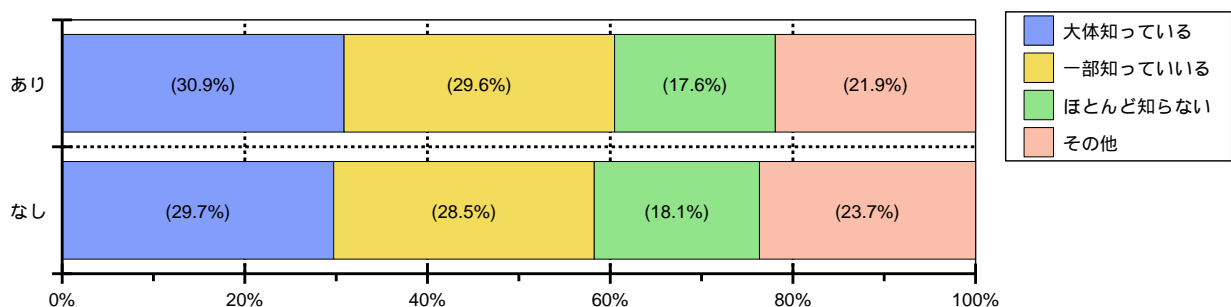


図5 - 3 暫定規制値の認知度 (未成年の家族の有無別)

問6 食品の暫定規制値について、どう思いますか。(複数回答)

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 暫定規制値以下なら安心 | 2 暫定規制値以下でも不安 |
| 3 暫定規制値が高すぎる(甘すぎる) | 4 暫定規制値が低すぎる(厳しすぎる) |
| 5 暫定ではない規制値が必要 | 6 特に気にしていない |
| 7 よく分からない | 8 その他 |

食品に対する暫定規制値については、「暫定規制値以下なら安心」との回答(17.3%)より「暫定規制値以下でも不安」との回答(31.0%)の方が高く、同様に「暫定規制値が低すぎる(厳しすぎる)」(1.9%)に対し「暫定規制値が高すぎる(甘すぎる)」(12.0%)が圧倒的に高く、暫定規制値に対する不安感・不信感が強く表れている。

男女間に有意差は見られない。

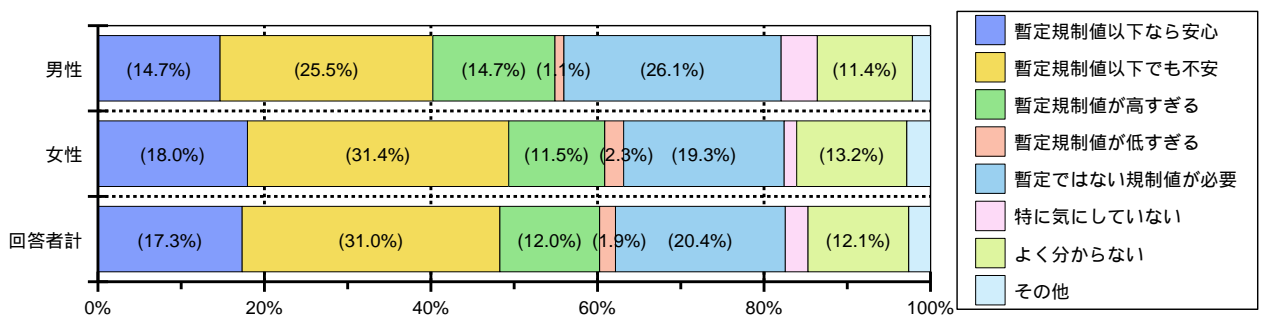


図6-1 暫定規制値に対する意識 (男女別)

年代間にも有意差は見られない。

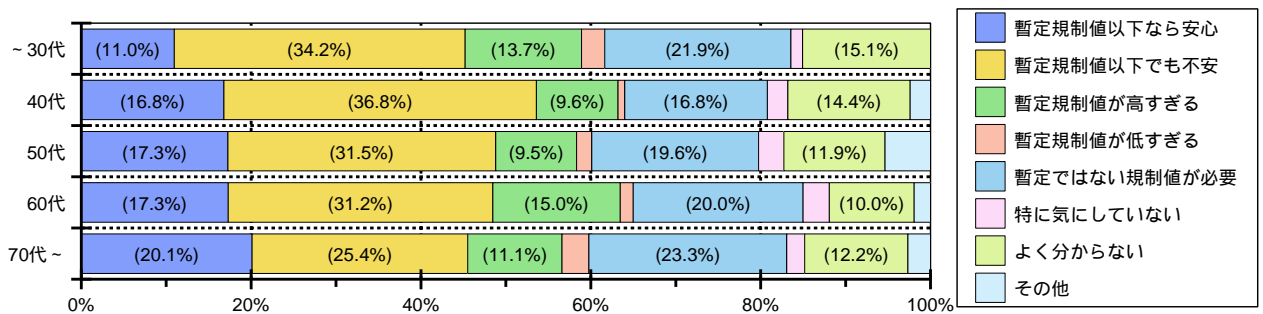


図6-2 暫定規制値に対する意識 (年代別)

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

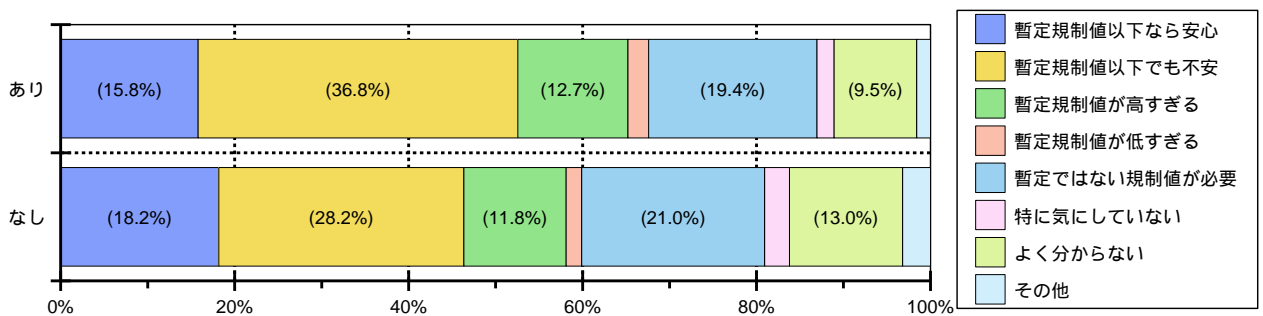


図6-3 暫定規制値に対する意識 (未成年の家族の有無別)

問7 食品を購入するとき、行政が発表している放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報を確認していますか。(単一回答)

- | | |
|-----------------------------|-----------|
| 1 大体確認している | 2 たまに確認する |
| 3 売られているものは安全だと思っているので確認しない | 4 気にしていない |
| 5 その他 | |

放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報については、「大体確認している」(42.2%)、「たまに確認する」(25.0%)を合わせると回答者の約2/3は確認している。

男女間に有意差は見られない。

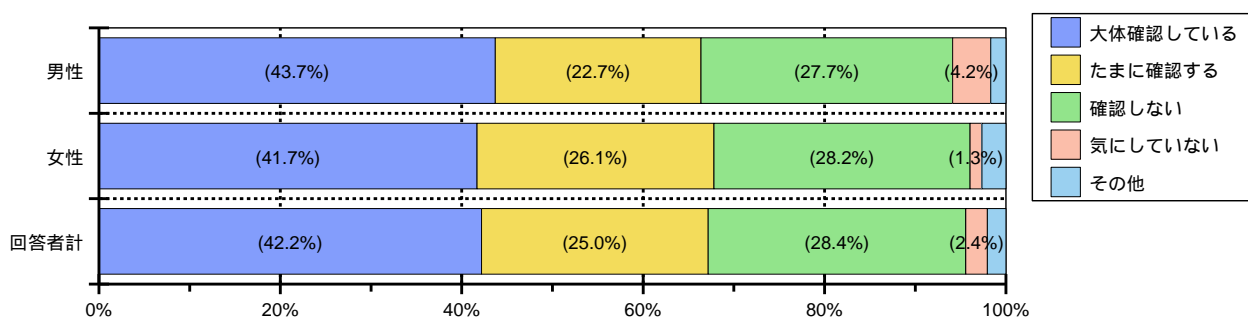


図7-1 放射性物質検出結果等の情報に確認状況 (男女別)

年代間にも有意差は見られないが、暫定規制値の認知度と同様、高年代の方が確認している割合は高い。

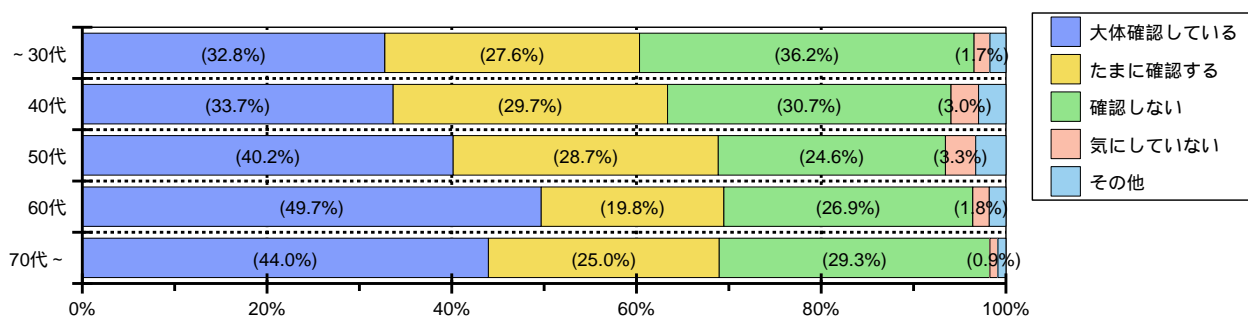


図7-2 放射性物質検出結果等の情報に確認状況 (年代別)

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

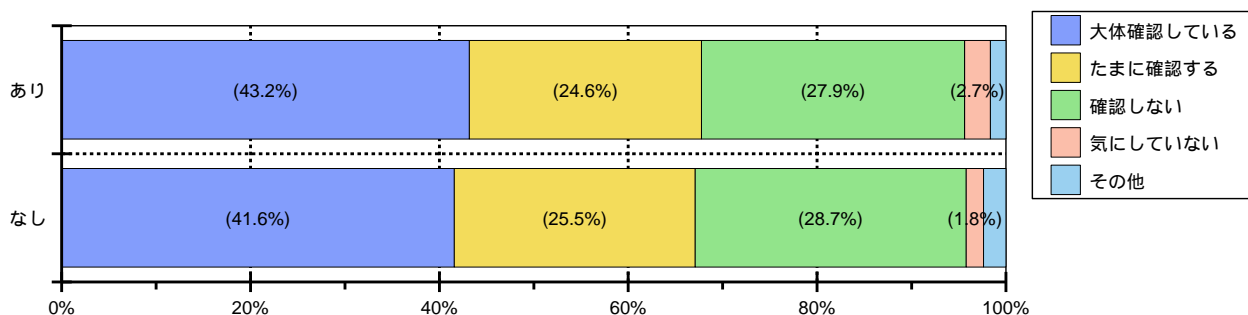


図7-3 放射性物質検出結果等の情報に確認状況 (未成年の家族の有無別)

問 8 放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報を，どのように確認していますか。(複数回答)

- | | | | |
|------------|-------|-----------|--------|
| 1 ホームページ | 2 新聞 | 3 テレビ・ラジオ | 4 店頭表示 |
| 5 家族・友人・知人 | 6 その他 | | |

放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報の確認方法としては、「テレビ・ラジオ」(36.3%)、「新聞」(35.4%)が圧倒的に高く、次いで「店頭表示」が14.7%で、「ホームページ」は1割にも満たない。

男女間に有意差は見られない。

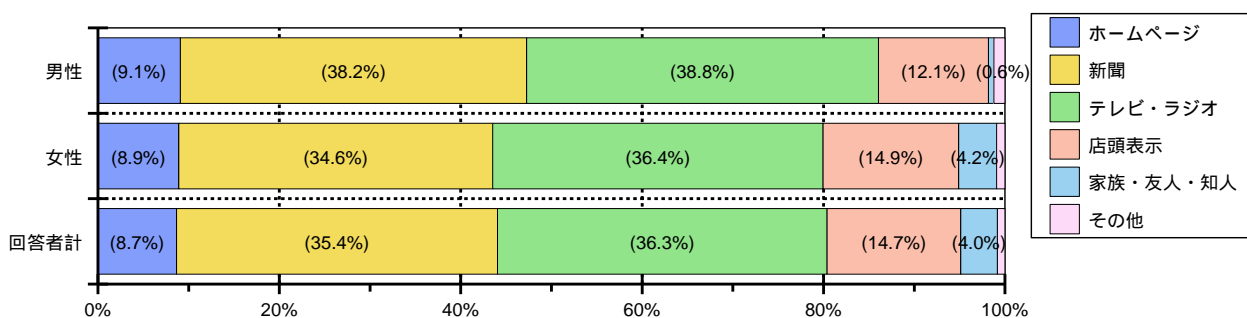


図 8 - 1 放射性物質検出結果等の情報の確認方法 (男女別)

年代間にも有意差は見られないが，若い世代ほど「ホームページ」の割合が多少高まっている。

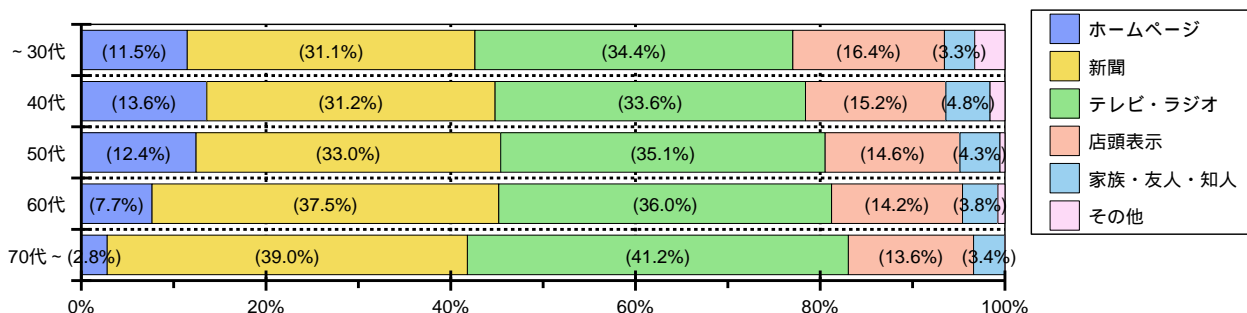


図 8 - 2 放射性物質検出結果等の情報の確認方法 (年代別)

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

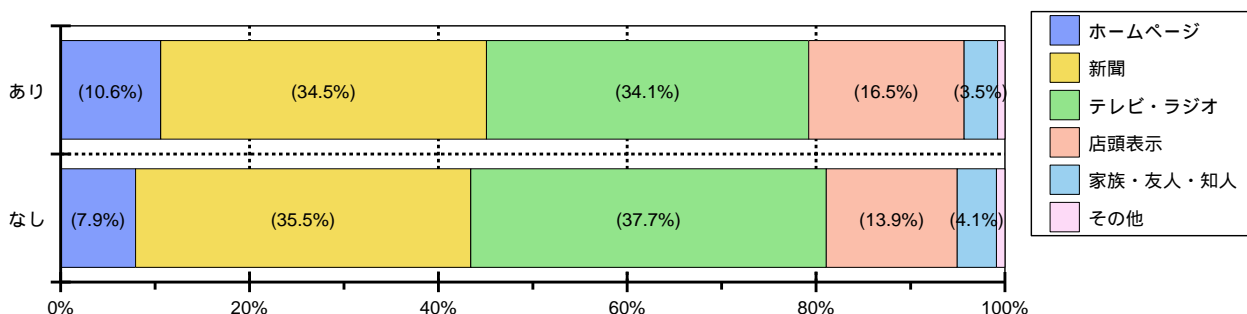


図 8 - 3 放射性物質検出結果等の情報の確認方法 (未成年の家族の有無別)

問9 ある産地で1つの食品について暫定規制値を超える放射性物質が検出された場合の、あなたの購買活動についてお聞きします。(単一回答)

- | | |
|---|------------------------------|
| 1 | その産地の全ての農畜水産物について購入を控える |
| 2 | その農畜水産物については、他の産地のものでも購入は控える |
| 3 | その農畜水産物については、他の産地のものを購入する |
| 4 | 特に気にせず購入する |
| 5 | その他 |

暫定規制値を超える放射性物質が検出された場合の購買活動としては、半数以上(57.0%)の回答者が「その農畜水産物については、他の産地のものを購入する」と回答し、「その産地の全ての農畜水産物について購入を控える」(25.4%)、「その農畜水産物については、他の産地のものでも購入は控える」(6.4%)を大きく上回り、比較的冷静な対応を取っていることがうかがわれる。

男女間に有意差が見られ、「特に気にせず購入する」の割合が女性より男性で高く、また「その農畜水産物については、他の産地のものを購入する」の割合が男性で下がっている。

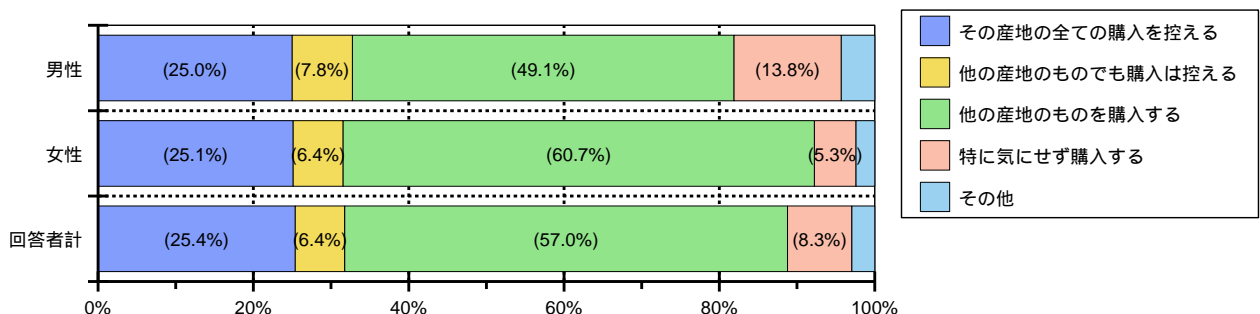


図9-1 暫定規制値を超えた場合の購買活動(男女別)

年代間には有意差は見られない。

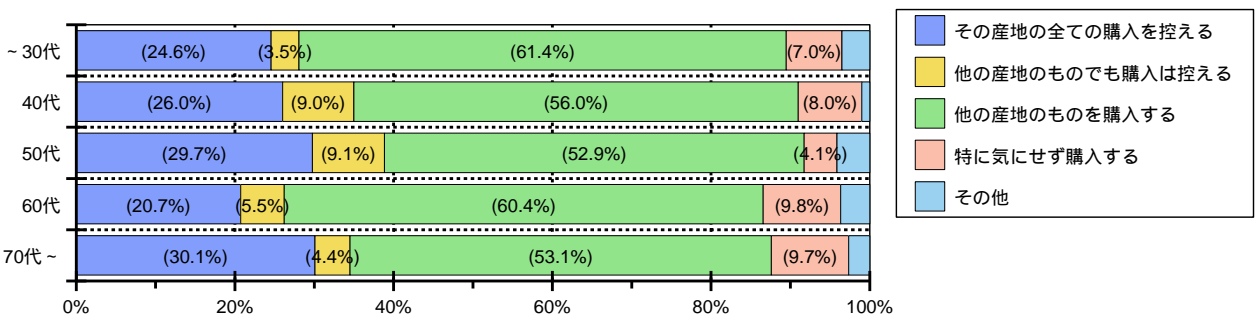


図9-2 暫定規制値を超えた場合の購買活動(年代別)

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

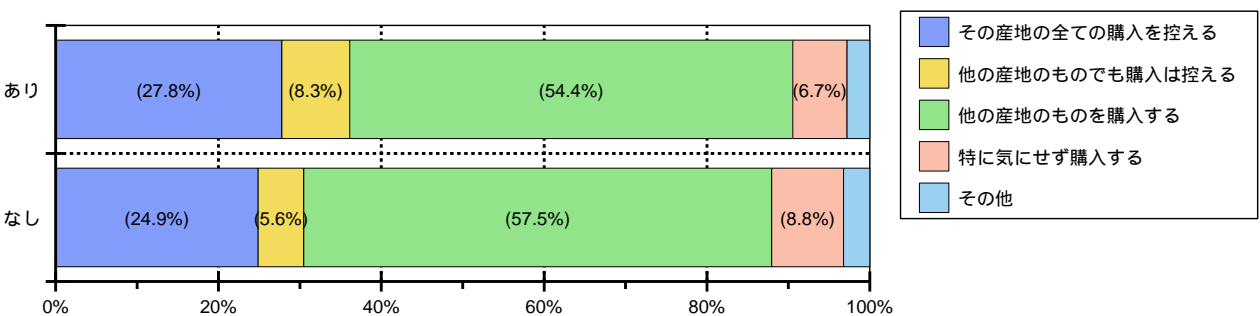


図9-3 暫定規制値を超えた場合の購買活動(未成年の家族の有無別)

問10 一度暫定規制値を超え、出荷制限がかかった後、暫定規制値以下あるいは不検出となり、出荷制限が解除された食品について、あなたならどうしますか。
(単一回答)

- | | |
|----------------------------|------------|
| 1 検出されていても暫定規制値以下なら食べる | 3 不検出なら食べる |
| 2 暫定規制値以下であっても検出されていれば食べない | 5 その他 |
| 4 不検出であっても不安なので食べない | |

出荷制限が解除された食品に対する購買活動としては、「検出されていても暫定規制値以下なら食べる」は20.0%と低く、「不検出なら食べる」が38.6%、「暫定規制値以下であっても検出されていれば食べない」が23.1%と、暫定規制値に対する不安感・不信感の影響がうかがえる。

男女間に有意差は見られない。

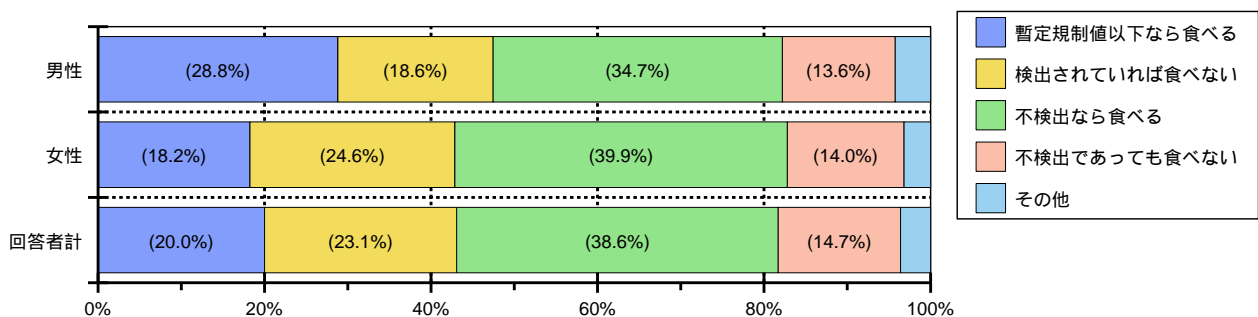


図10-1 出荷制限が解除された場合の購買活動 (男女別)

年代間にも有意差は見られない。

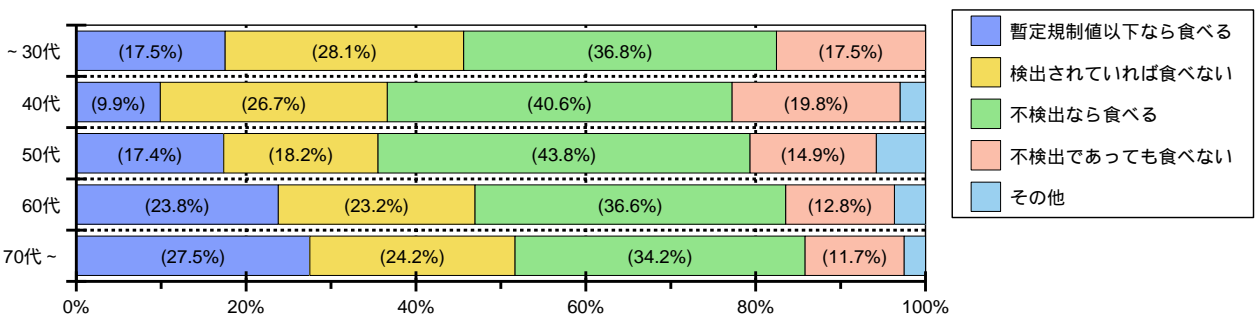


図10-2 出荷制限が解除された場合の購買活動 (年代別)

未成年の家族の有無間には有意差が見られ、未成年の家族のいる回答者では「検出されていても暫定規制値以下なら食べる」の割合が低く「不検出であっても不安なので食べない」の割合が高くなっており、子どもへの放射性物質の影響を懸念する意識の表れと考えられる。

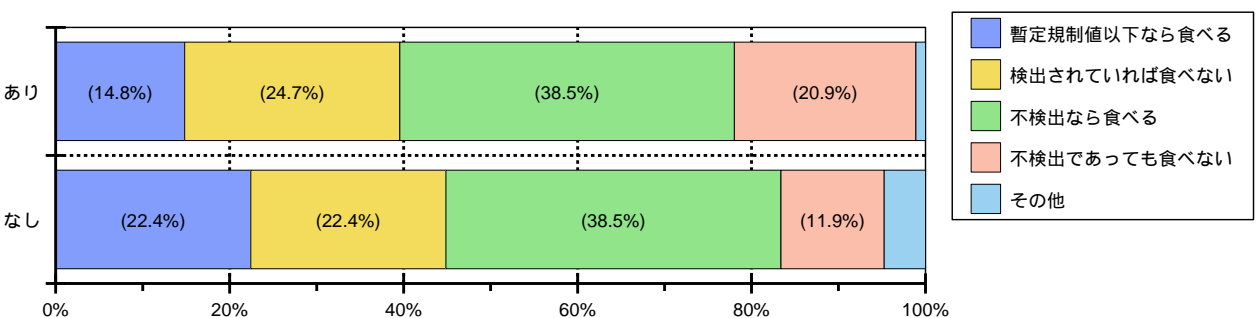


図10-3 出荷制限が解除された場合の購買活動 (未成年の家族の有無別)

問 1 1 福島第一原子力発電所事故後，食品を購入するとき，何か変わったことはありますか。（複数回答）

- 1 宮城県産以外のものを買うようになった
- 2 国産より外国産を買うようになった
- 3 復興支援のため，宮城県産のものを積極的に買うようになった
- 4 出荷制限などの情報を積極的に集めるようになった
- 5 店頭で放射性物質関連の情報を表示している店を選んで行くようになった
- 6 水道水の使用には気を遣い，ミネラルウォーターを買うようになった
- 7 特に変わりはない
- 8 その他

原発事故後の食品購入行動の変化としては、「出荷制限などの情報を積極的に集めるようになった」(24.0%)、「復興支援のため，被災地産のものを積極的に買うようになった」(23.2%)が高い一方，「宮城県産以外のものを買うようになった」(6.0%)，「国産より外国産を買うようになった」(8.4%)は低く，比較的冷静な対応がなされているといえる。

男女間に有意差は見られない。

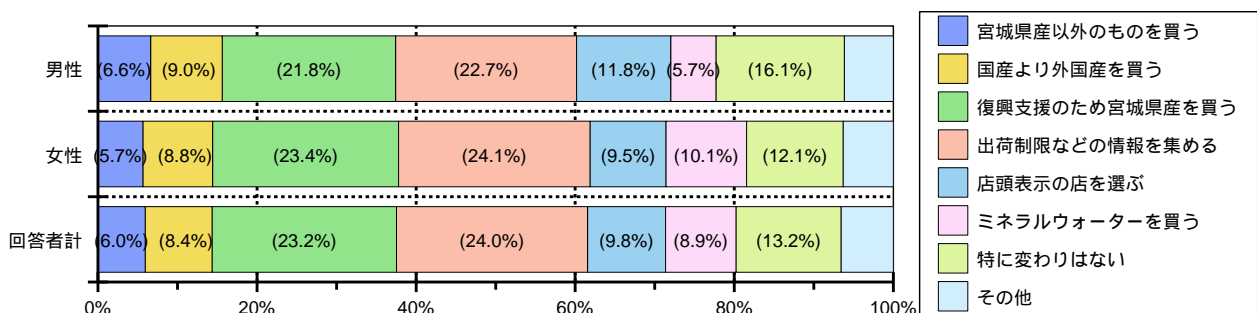


図11 - 1 原発事故後の食品購入行動の変化（男女別）

年代間には有意差が見られ，60代で「復興支援のため，宮城県産のものを積極的に買うようになった」の割合が高く，50代で「水道水の使用には気を遣い，ミネラルウォーターを買うようになった」，「特に変わりはない」の割合が高い。

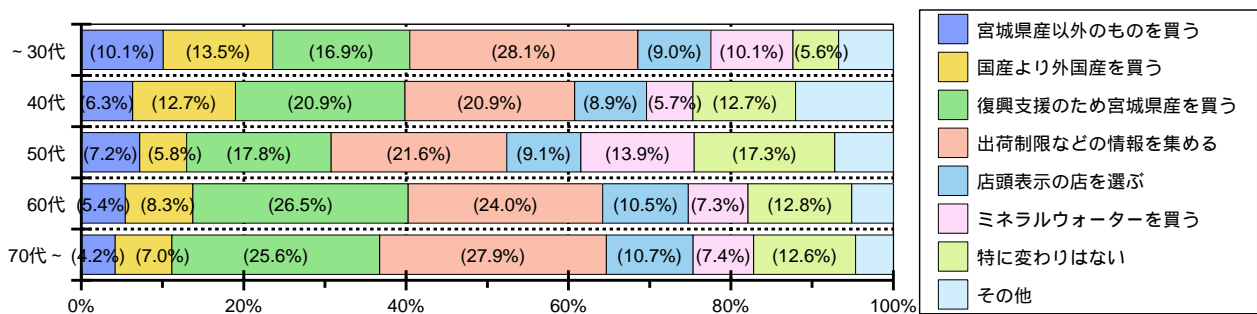


図11 - 2 原発事故後の食品購入行動の変化（年代別）

未成年の家族の有無間にも有意差は見られ、未成年の家族のいる回答者では「宮城県産以外のものを買うようになった」、「国産より外国産を買うようになった」の割合が高く、「復興支援のため、被災地産のものを積極的に買うようになった」の割合が低くなっており、これは子どもへの放射性物質の影響を懸念する意識の表れと考えられる。

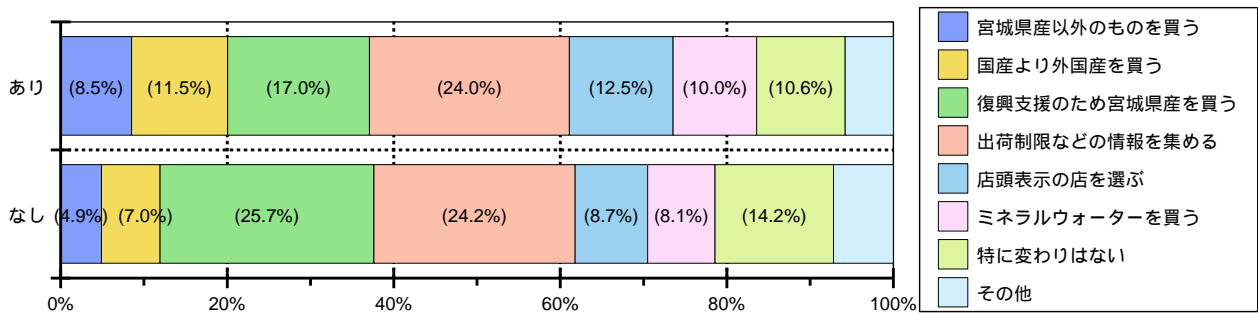


図11 - 3 原発事故後の食品購入行動の変化（未成年の家族の有無別）

食の安全安心について

問12 食の安全安心全般について、不安を感じていますか。(単一回答)

- | | | |
|--------------|------------|-------------|
| 1 不安を感じる | 2 やや不安を感じる | 3 どちらともいえない |
| 4 あまり不安を感じない | 5 不安を感じない | 6 その他 |

食の安全安心全般についての不安については、「不安を感じる」(36.7%)、「やや不安を感じる」(44.9%)を合わせて81.6%と、ほとんどの回答者が食の安全安心全般について不安を感じている。

昨年度(平成22年度)のアンケート調査結果では、「不安を感じる」(26.3%)、「やや不安を感じる」(53.8%)を合わせて80.1%であり、今年度の結果81.6%とあまり変わりはないが、「不安を感じる」の割合が昨年度26.3%から今年度36.7%と増えており、不安の度合いは若干強くなっているようである。

男女間に有意差が見られ、少数ではあるが、男性は女性に比べて「あまり不安を感じない」、「不安を感じない」の割合が高い。

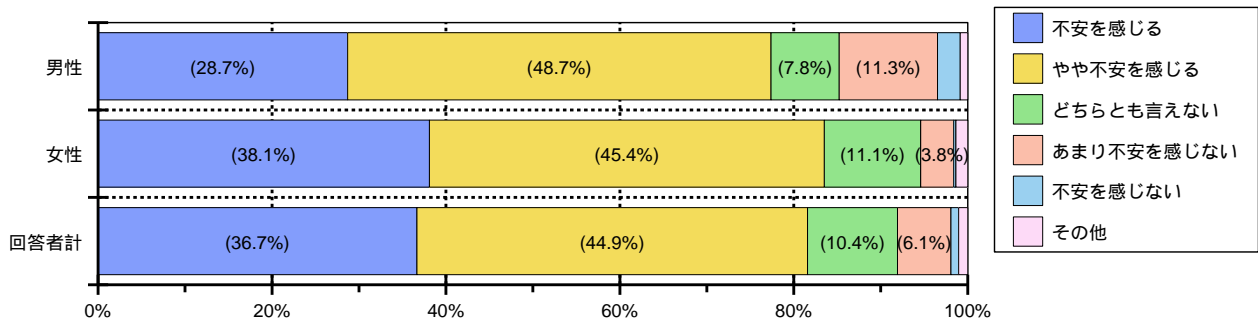


図12-1 食の安全安心全般についての不安(男女別)

年代間には有意差は見られない。

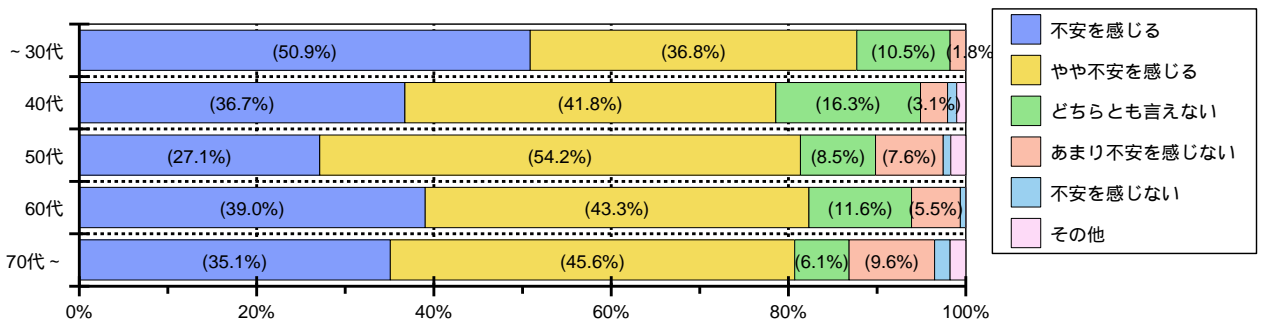


図12-2 食の安全安心全般についての不安(年代別)

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

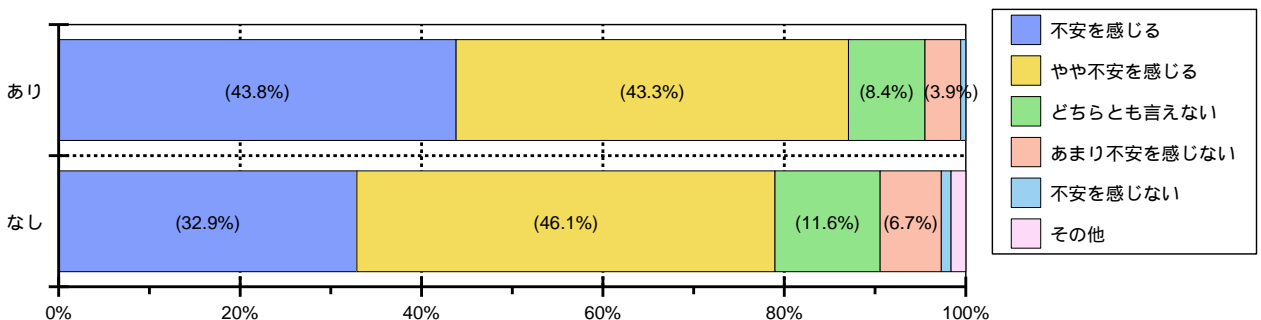


図12-3 食の安全安心全般についての不安(未成年の家族の有無別)

問 1 3 食の安全性について，下記の項目各々に，どのくらい不安を感じていますか。
（ 5 段階評価）

1 食品添加物について	2 残留抗生物質について	3 環境汚染物質について
4 残留農薬について	5 異物混入について	6 アレルギー物質について
7 有害微生物について	8 家畜伝染病について	9 遺伝子組換え食品について
10 産地表示の信頼性	11 期限表示の信頼性	12 成分表示の信頼性
13 健康食品の安全性	14 輸入食品の安全性	15 その他

評 価	1 強く感じている	2 やや感じている	3 どちらともいえない
	4 あまり感じていない	5 全く感じていない	

不安を感じている項目としては、「環境汚染物質」(4.25点)がトップで，次いで「残留農薬」(4.17点)、「残留抗生物質」(4.07点)、「輸入食品の安全性」(4.06点)の順である。

昨年度のアンケート調査結果では、「残留農薬」，「残留抗生物質」，「環境汚染物質」，「輸入食品の安全性」，「食品添加物」の順であり，放射性物質の影響が「環境汚染物質」への不安が増してきている。

表 1 項目各々についての不安（男女別）

項 目	男	女	回答者計
1 食品添加物について	3.88	4.02	3.99
2 残留抗生物質について	3.99	4.09	4.07
3 環境汚染物質について	4.16	4.28	4.25
4 残留農薬について	4.20	4.16	4.17
5 異物混入について	3.77	3.88	3.86
6 アレルギー物質について	3.15	3.43	3.36
7 有害微生物について	3.68	3.84	3.80
8 家畜伝染病について	3.81	4.04	3.99
9 遺伝子組換え食品について	3.57	3.90	3.82
10 産地表示の信頼性	3.60	3.69	3.67
11 期限表示信頼性	3.60	3.42	3.46
12 成分表示の信頼性	3.54	3.51	3.52
13 健康食品の安全性	3.70	3.68	3.68
14 輸入食品の安全性	4.08	4.06	4.06

ポイントは、「強く感じている」を5点，「やや感じている」を4点，「どちらとも言えない」を3点，「あまり感じない」を2点，「全く感じない」を1点とし，平均したもの。

一方、食の安全安心全般についての不安と、項目各々についての不安の関連性について、満足度調査（CS分析）の手法を用いて分析すると、不安の度合いが強く（満足度が低く）、かつ、食の安全安心全般への不安に対して影響度が高い（重要度が高い）項目としては、「環境汚染物質」がトップで、次いで「残留農薬」、「食品添加物」、「残留抗生物質」、「輸入食品の安全性」、「健康食品の安全性」の順となる。

平均ポイントだけを見ると「食品添加物」は「残留抗生物質」、「輸入食品の安全性」の次で5番目であるが、食の安全安心全般に対する不安への影響度を考慮すると、「残留抗生物質」、「輸入食品の安全性」より優先的に軽減していく措置を講ずれば、食の安全安心全般に対する不安が軽減される効果が高いことがうかがえる。

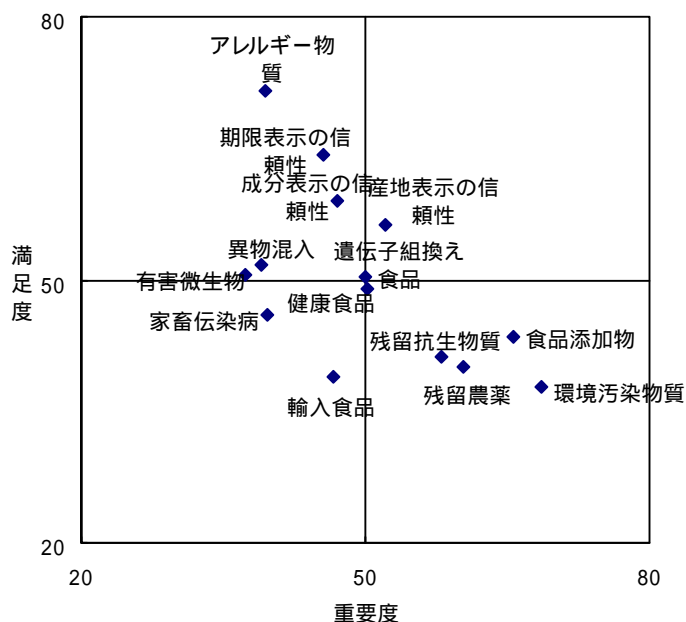


図13 - 2 不安項目のCS分析

表2 食の安全安心全般に対する不安の軽減に効果の高い項目

順位	項目
1	環境汚染物質
2	残留農薬
3	食品添加物
4	残留抗生物質
5	輸入食品の安全性
6	健康食品の安全性

問14 昨年と比較して、食の安全安心について意識の変化はありましたか。
(単一回答)

- | | | |
|----------------|------------------|-------|
| 1 不安を感じるようになった | 2 やや不安を感じるようになった | |
| 3 変わらない | 4 やや不安を感じなくなった | |
| 5 不安を感じなくなった | 6 以前から不安に思っていない | 7 その他 |

昨年に比較して食の安全安心に関する意識は、「不安を感じるようになった」(46.4%)、「やや不安を感じるようになった」(36.2%)を合わせて82.6%と非常に高くなっており、これは問12での昨年度の調査結果との比較と同じ傾向を示しており、不安の度合いが増しているといえる。

男女間に有意差があり、男性は「不安を感じるようになった」の割合が多少低く、その分「不安を感じなくなった」の割合が高くなっている。

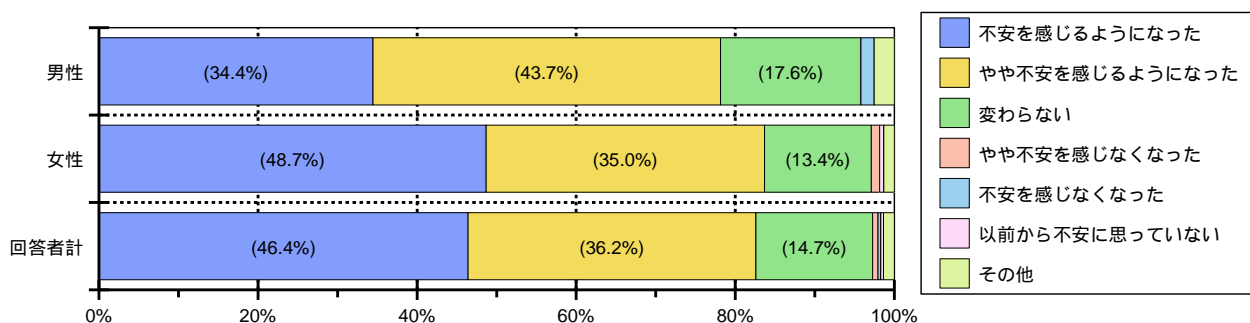


図14-1 昨年と比較した食の安全安心について意識の変化 (男女別)

年代間には有意差は見られない。

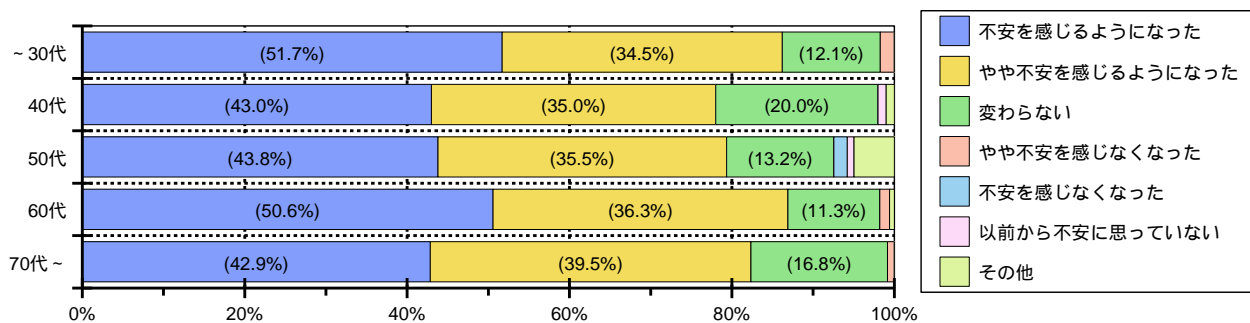


図14-2 昨年と比較した食の安全安心について意識の変化 (年代別)

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

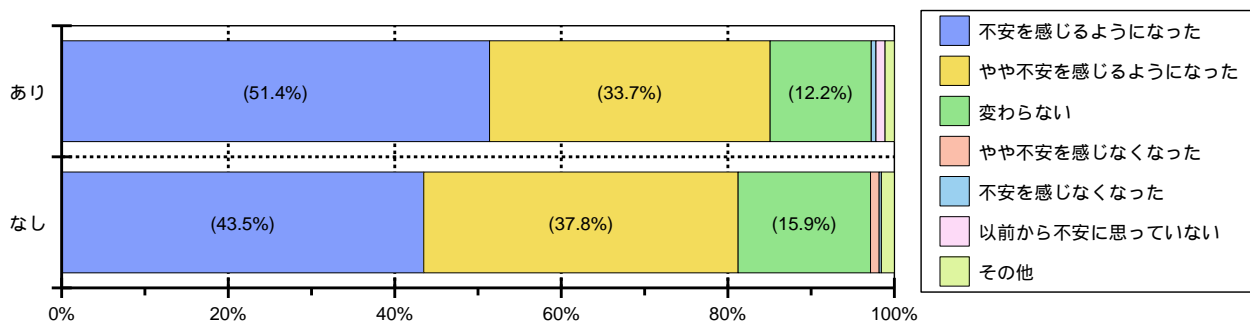


図14-3 昨年と比較した食の安全安心について意識の変化 (未成年の家族の有無別)

問15 食品の安全性を確保するため、あなたは下記の取り組みについて、どのくらい重要だと思いますか（重要度）。また、その取り組みに対して現在十分に行われていると思いますか（満足度）。（5段階評価）

1 食品関係法令の改正	2 食品の安全性を証明する第三者機関認証
3 食品製造企業の自主管理体制の強化	4 食品の衛生・監視指導の強化
5 輸入食品の検査体制の強化	6 県民総参加運動の推進
7 消費者への支援強化	8 食に関する正しい情報の提供
9 食品表示の指導・監視体制の強化	10 違反、事件、事故の速やかな情報公開
11 その他	

重要度	1 大変重要だと思う	2 やや重要だと思う	3 どちらともいえない
	4 あまり重要と思わない	5 全く重要と思わない	
満足度	1 十分行われている	2 大体行われている	3 どちらともいえない
	4 あまり十分でない	5 全く不十分である	

食の安全安心を確保するための各取り組みについて、大変重要だと考える回答者が多い（重要度が高い）が、十分に行われていないと認識されている（満足度が低い）取り組みをより優先的に取り組むべきと考え、「違反、事件、事故の速やかな情報公開」、「輸入食品の検査体制の強化」、「食に関する正しい情報の提供」、「食品の衛生・監視指導の強化」の順である。

昨年度のアンケート調査結果では、「輸入食品の検査体制の強化」、「違反、事件、事故の速やかな情報公開」、「食品の衛生・監視指導の強化」、「食に関する正しい情報の提供」の順であり、情報公開に関する意識の高まりが見られる。

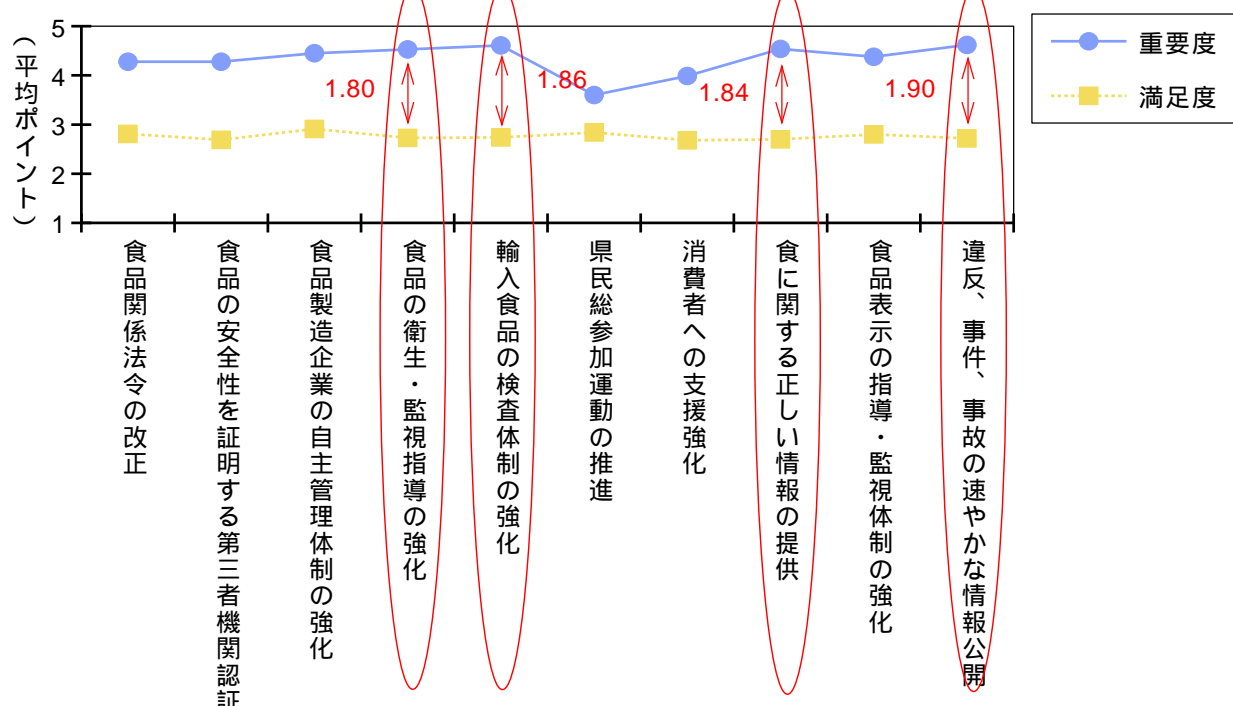


図15 食品の安全安心を確保するための取り組みの重要度と満足度

ポイントは、「大変重要だと思う」「十分行われている」を5点、「やや重要だと思う」「大体行われている」を4点、「どちらとも言えない」を3点、「あまり重要と思わない」「あまり十分でない」を2点、「全く重要と思わない」「全く不十分である」を1点とし、平均したもの。赤字で示した数値は（重要度）-（満足度）。

問16 現在の食に対する価値観について、次の中から優先度が高い順に番号を記入してください。(優先度の高い順に3つまで)

- | | | |
|-----------------------|--------------|------------|
| 1 美味しいものを追求したい | 2 高価なものを摂りたい | 3 健康に配慮したい |
| 4 安全性に配慮したい | 5 食費を節約したい | |
| 6 価格にこだわらず、国産品にこだわりたい | | |
| 7 価格にこだわらず、県産品にこだわりたい | | 8 その他 |

現在の食に対する価値観について、1位～3位に挙げられた項目を単純合計すると、食に対する価値観としては、有効回答者570人中、「安全性に配慮したい」(522人)、「健康に配慮したい」(493人)と回答する人が圧倒的に多く、次いで「美味しいものを追求したい」(198人)、「価格にこだわらず、国産品にこだわりたい」(179人)、「食費を節約したい」(148人)、「価格にこだわらず、県産品にこだわりたい」(111人)が続く。

昨年度のアンケート調査結果では、有効回答者数507人中、「安全性に配慮したい」(450人)、「健康に配慮したい」(402人)、「価格にこだわらず、国産品にこだわりたい」(230人)、「美味しいものを追求したい」(153人)、「価格にこだわらず、県産品にこだわりたい」(148人)、「食費を節約したい」(121人)の順であり、国産品、県産品へのこだわりが低くなっている。

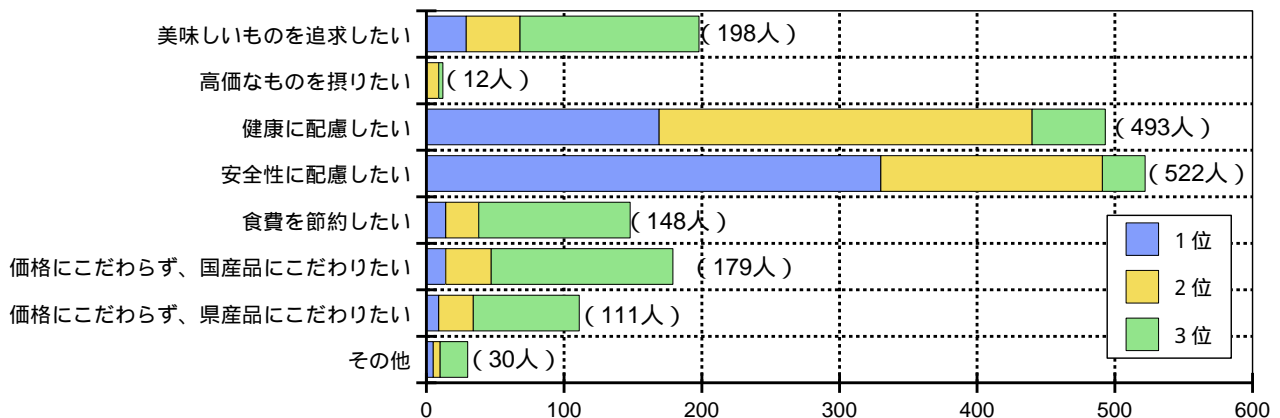


図16-1 食に対する価値観 (単純合計)

男女間に有意差は見られない。

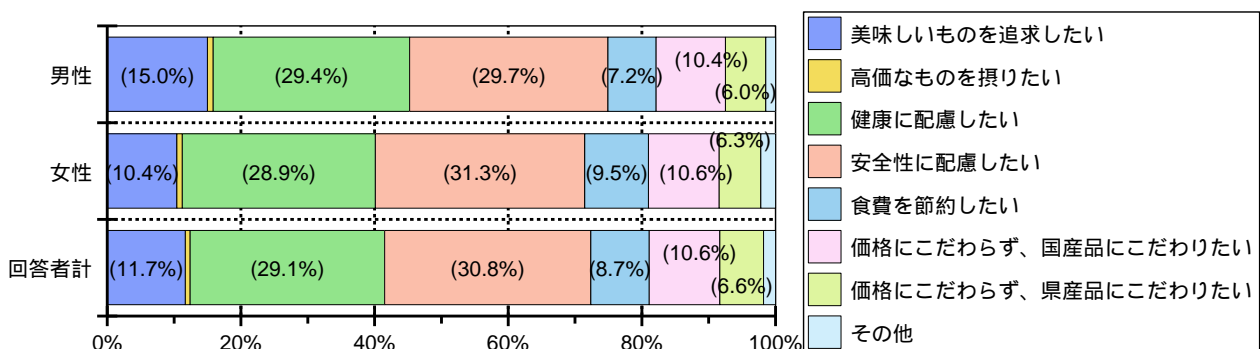


図16-2 食に対する価値観 (単純合計, 男女別)

年代間には有意差が見られ、40代は「食費を節約したい」が高く「価格にこだわらず、県産品にこだわりたい」が低い。逆に60代は「食費を節約したい」が低く「価格にこだわらず、国産品にこだわりたい」が高い。70代以上も「食費を節約したい」が低い。家計に余裕が少ないと思われる若い世代ほど「食費の節約」を気にせざるを得ないことがうかがえる。

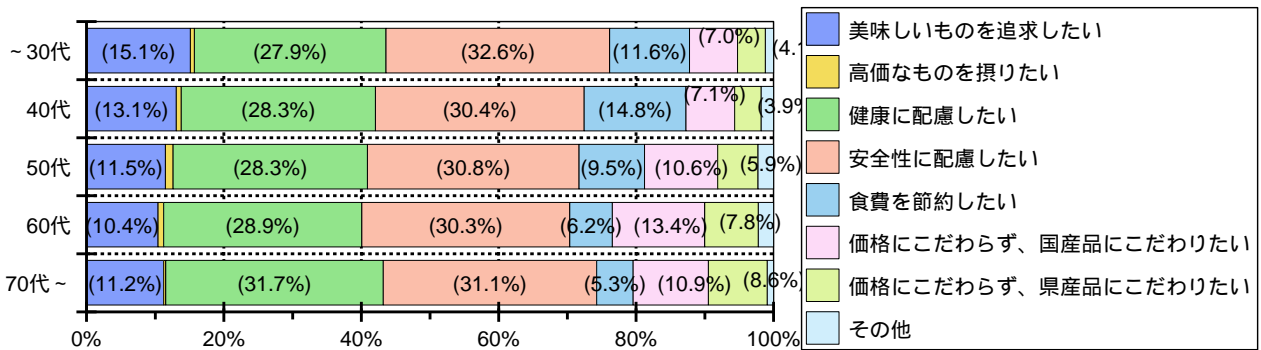


図16-3 食に対する価値観 (単純合計, 年代別)

未成年の家族の有無間には有意差は見られない。

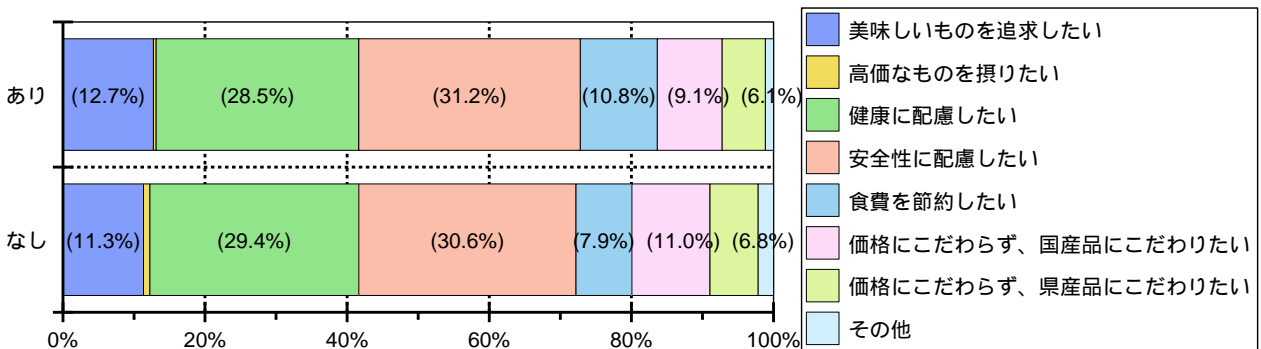


図16-4 食に対する価値観 (単純合計, 未成年の家族の有無別)

一方、1位を3点、2位を2点、3位を1点として各項目の得点を加重合計した場合も、単純合計の場合と同様に、「安全性に配慮したい」(1,343点)、「健康に配慮したい」(1,102点)の順で圧倒的に高く、次いで「美味いものを追求したい」(295点)、「価格にこだわらず、国産品にこだわりたい」(240点)、「食費を節約したい」(200点)、「価格にこだわらず、県産品にこだわりたい」(154点)が続く。

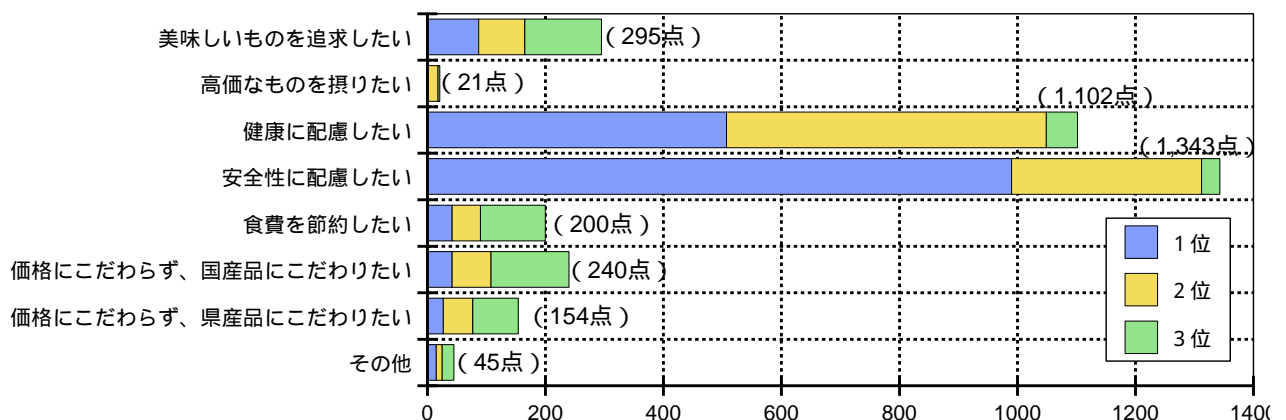


図16-5 食に対する価値観 (加重合計)

加重合計の場合は、男女間に有意差が見られ、男性は女性より「美味しいものを追求したい」が高く「安全性に配慮したい」が低い。

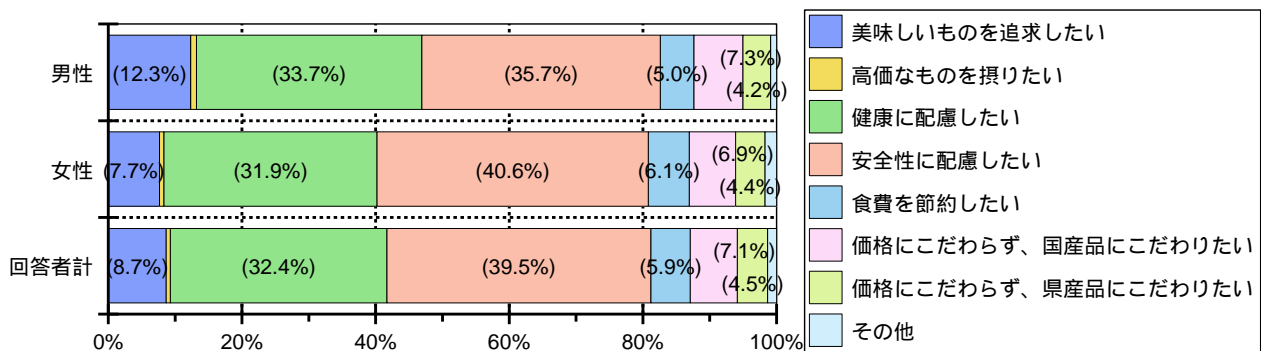


図16 - 6 食に対する価値観（加重合計，男女別）

年代間にも有意差が見られ、30代以下、40代は他の年代より「食費を節約したい」が高く「価格にこだわらず、県産品にこだわりたい」が低い。逆に60代は「食費を節約したい」が低く「価格にこだわらず、国産品にこだわりたい」が高い。70代以上は「食費を節約したい」が低く、「健康に配慮したい」、「価格にこだわらず、県産品にこだわりたい」が高い。

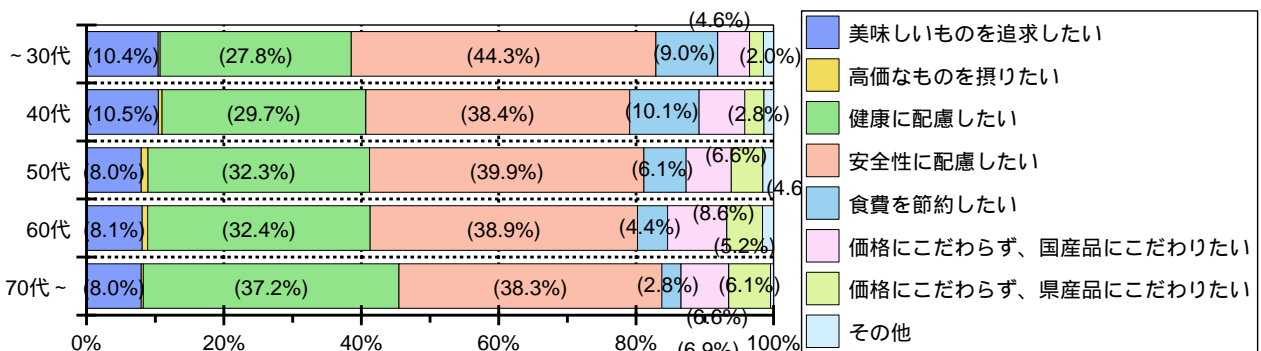


図16 - 7 食に対する価値観（加重合計，年代別）

未成年の家族の有無間にも有意差が見られ、未成年の家族がいる回答者は「食費を節約したい」の割合が高い。

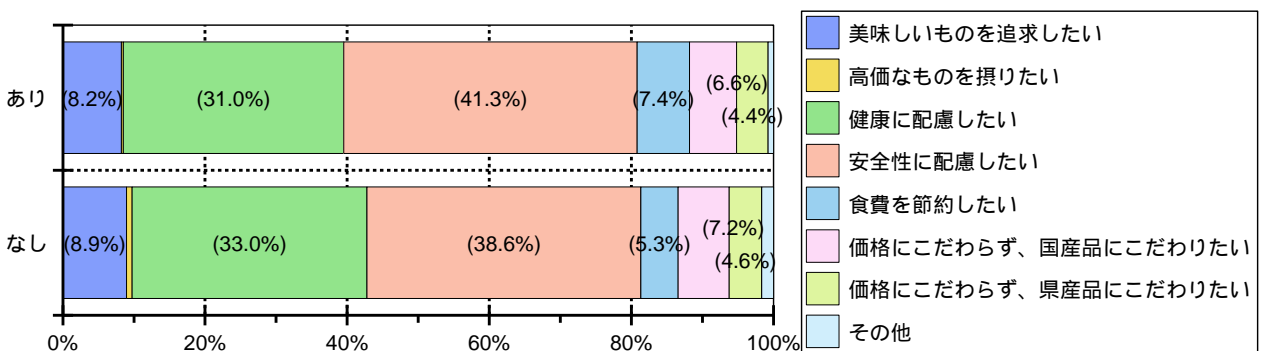


図16 - 8 食に対する価値観（加重合計，未成年の家族の有無別）

問17 さらに食の安全安心に向けた取り組みを実践するために、県が取り組むべきこととして望むのは次のうちどれですか。(複数回答)

- 1 生産者の取組への支援
- 2 安全な農水産物生産環境づくり支援
- 3 食関連事業者に対する支援
- 4 生産者に対する安全性の監視及び指導の徹底
- 5 食関連事業者に対する安全性の監視及び指導の徹底
- 6 食品表示の適正化の推進
- 7 情報の収集、分析及び公開
- 8 消費者、生産者及び食関連事業者との相互理解の促進
- 9 県民総参加運動の推進
- 10 県民意見の施策への反映
- 11 (県の)体制の整備及び関係機関等との連携強化
- 12 審議会(「みやぎ食の安全安心推進会議」)の機能強化
- 13 その他

食の安全安心に向けて県が取り組むべきこととしては、「安全な農水産物生産環境づくり支援」(13.6%)、「生産者の取組への支援」(11.8%)、「生産者に対する安全性の監視及び指導の徹底」(11.6%)、「食関連事業者に対する安全性の監視及び指導の徹底」(10.8%)、「情報の収集、分析及び公開」(10.1%)に関わることが求められている。

昨年度のアンケート調査結果では、「安全な農水産物生産環境づくり支援」(12.9%)、「生産者に対する安全性の監視及び指導の徹底」(12.3%)、「生産者の取組への支援」(12.2%)、「食関連事業者に対する安全性の監視及び指導の徹底」(11.7%)、「食品表示の適正化の推進」(10.2%)の順であり、今回の大震災や原発事故の影響からか、「生産者の取組への支援」や「情報の収集、分析及び公開」が少し上位に上がってきている。

男女間に有意差は見られない。

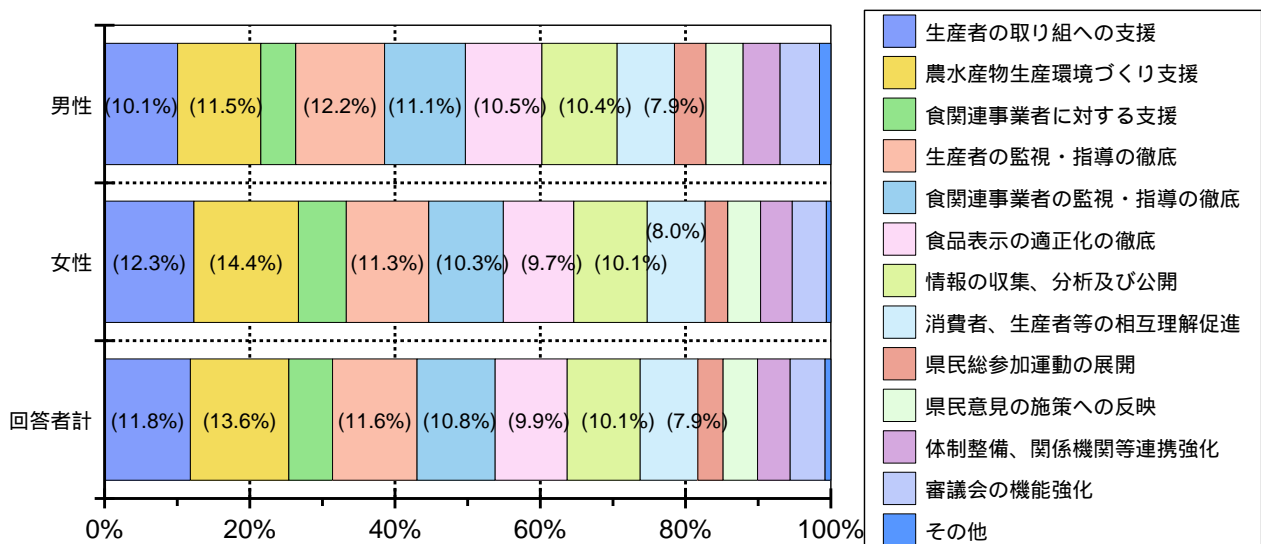


図17-1 食の安全安心に向けて取り組むべきこと(男女別)

年代間にも有意差は見られないが、若い年代ほど「生産者の取組への支援」、「安全な農水産物生産環境づくりの支援」、「食関連事業者に対する支援」といった生産者等への支援に対する要望が高く、高齢の年代ほど「県民総参加運動の推進」、「県民意見の施策への反映」、「(県の)体制の整備及び関係機関等との連携強化」、「審議会(「みやぎ食の安全安心推進会議」)の機能強化」といった体制整備等に対する要望が高い傾向にあるようである。

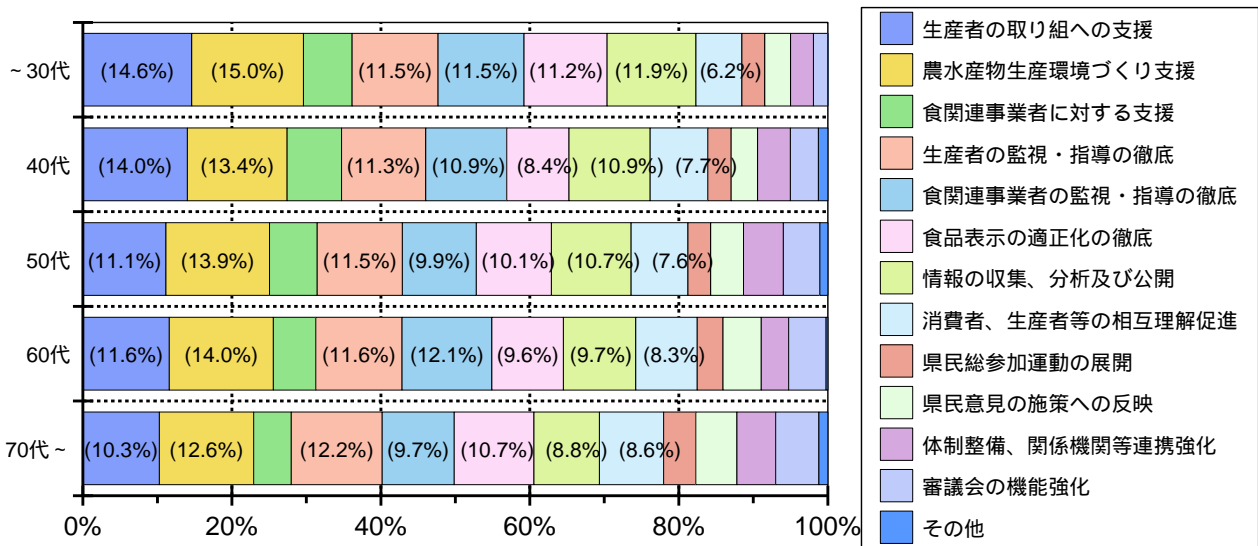


図17-2 食の安全安心に向けて取り組むべきこと(年代別)

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

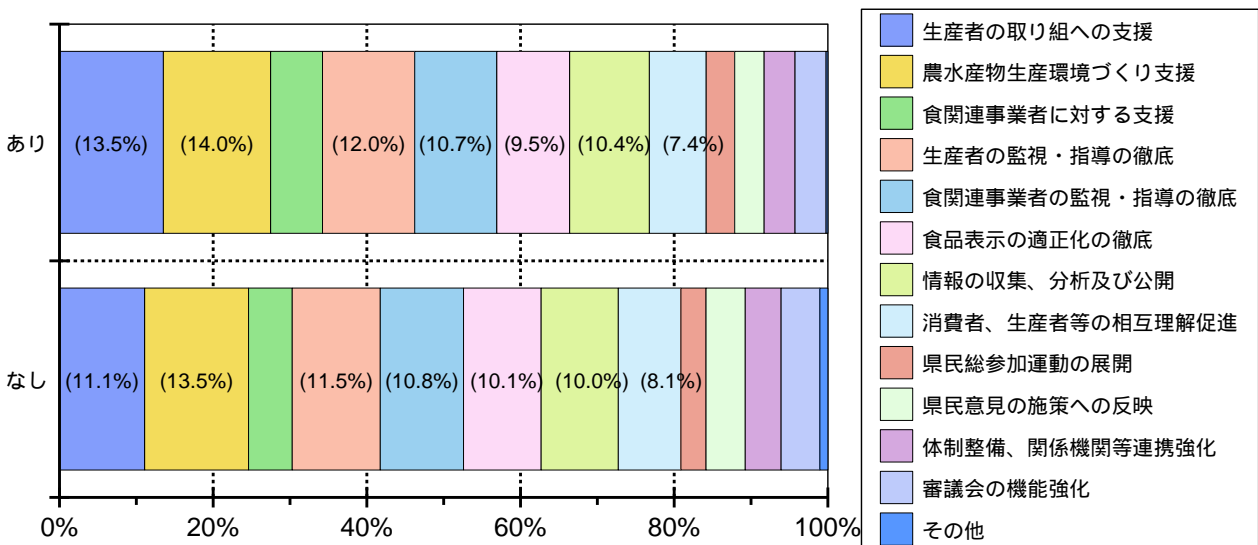


図17-3 食の安全安心に向けて取り組むべきこと(未成年の家族の有無別)

問18 食の安全安心全般、国や県の施策についての意見、提言(自由記述)

292件の記述回答があり、その内容としては、放射性物質に関する情報の提供や、検査体制の強化及び検査結果の速やかな開示が多かった。(個別の内容は省略)